

# 知立弘法さんかわら版

発行編集部

大塚耕平事務所

☎052-757-1955

kouhei@oh-kouhei.org

皆さん、こんにちわ。初夏が待ち遠しい季節になりました。とは言え、朝晩は冷え込む日もあります。くれぐれもご自愛ください。

昨年「尾張名古屋・歴史街道を行く―杜寺城郭・幕末史―」をお送りしています。今年も中世鎌倉街道を東から西に歩いていきます。題して「鎌倉街道を歩く」。今月は信長の「稲生の戦い」と「万場の渡し」の歴史を旅します。

## ★末森城・那古野城・清洲城

清洲城の東、那古野城北の庄内川左岸が舞台となったのが「稲生の戦い」です。織田信長と弟信行との家督争いを巡る戦いです。

一五五二(天文二十一年)年、織田信秀が亡くなると家督は「那古野城」の嫡男「信長」が継承したものの、家中には信秀晩年の居城「末森城」を継いだ次男「信行」を推す声もありました。

信長は平素から素行が悪く、一五五三(天文二十二年)年には「傳役平手政秀」が諫死する事件も起き、当主に相応しくないと、家臣もいました。



信長は、一五五五(弘治元)年、主家である「清洲織田氏(大和守家)」の「織田信友」を滅ぼして清洲城を奪い、那古野城は家臣の「林秀貞」が留守居役になります。

この頃、三河国境に配した「鳴海城」の「山口教継」が離反し、今川氏に寝返りました。一五五六(弘治二)年、美濃では政変が起き、信長の舅であり、後ろ盾であった「美濃国主斎藤道三」が嫡男「義龍」との戦いで敗死。さらに尾張上四郡を支配する「岩倉織田氏(伊勢守家)」が義龍と手を結んで信長に敵対。信長を取り巻く情勢は厳しさを増していました。

信長では家中をまとめられず、難局を乗り切れないと考えた「林秀貞」と「信行家臣の柴田勝家」等が結託し、信長を排して信行に家督を継がせよう。と画策。信行自身も正嫡を自称し、信長領を押し立てて砦を構えるなど、対決姿勢を鮮明にしました。

## ★稲生の戦い

こうした動きに対し、信長は「佐久間盛重」に命じて庄内川左岸に「名塚砦」を築かせ、遂に稲生原での合戦に至ります。

信長軍は清洲南東の於多井川(庄内川)に進軍。東から来た「柴田軍」、南から来た「林軍」と戦いが始まり、信長公記によれば、信長勢七百人に対し、信行勢は千七百人を擁していました。

戦力差に加え、戦上手の「柴田勝家」に押され、信長勢は苦戦。柴田軍が信長本陣に迫った際には、信長の周りに「織田信房」「森可成」等の重臣数人と中間ら約四十人だけという危機に立たされました。

しかし、信房、可成兩名が奮闘。柴田軍の將兵は、本来の当主である信長から怒声を浴びせられると怯み、退散したと伝わります。ルイス・フロイスの日本史には、信長は尋常でない大声の持ち主だったと記録されています。

信長軍は勢いを取り戻し、信長自身も信行方重臣を槍で突き伏せ、信長勢は信行勢四百五十人余を討ち取りました。信行勢は敗走し、末森城と那古野城に籠城。信長は両城の城下を焼き払いました。

末森城にいた母「土田御前」の取りなしで信行は助命され、清洲城で信長と対面して許されました。信行についた「林秀貞」と「柴田勝家」等も信長に謝罪し、忠誠を誓います。

その後信行は再度謀反を企てますが、信行を見限った「柴田勝家」が信長に内通。一五五七(弘治三)年、信長が病に臥しているとして、見舞いのために呼び出された清洲城北櫓の天主次の間で謀殺されました。

## ★万場の渡しと万場宿・岩塚宿

さて、稲生から南下して「鎌倉街道」に戻りましょう。

宮宿から北上して「古渡」で西に方向を変え、「露橋」から北西に進んで「小栗橋」を越え、「豊臣秀吉」生誕地を横目に歩くと、まもなく庄内川に至ります。小栗橋の名前は歌舞伎や狂言で知られる「小栗判官」に由来します。

江戸時代の旅人は「豊国神社」を知り

ません。豊国神社は一八八五(明治十八)年創建だからです。江戸時代に「豊臣秀吉」について語られることはありませんでした。本殿東側に秀吉生誕地の石碑がありますが、出生地については、下中八幡宮、常泉寺辺りなど、諸説あります。隣接する「妙行寺」は「加藤清正」生誕地です。

庄内川を渡ると「萱津宿」に向かいます。近世東海道を旅する場合、「七里の渡し」の海路を避けたい旅人は、「佐屋宿」から川を下るか、「萱津宿」から陸路、鎌倉街道や「美濃街道」を進んで「木曾川」を目指しました。

佐屋宿を目指して庄内川を渡る場所が「万場の渡し」です。万場の渡しは船頭を務める六軒が渡河を担いました。尾張名所図会には馬二頭、人九人、駕籠一つ、船頭二人が描かれています。海路の七里の渡しは馬が乗れませんでした。万場の渡しは馬が乗れたようです。

万場の渡しを挟んで万場宿と向き合っていたのが「岩塚宿」です。両宿は一六三四(寛永十一年)年に置かれ、二宿で一宿分の機能を果たす特異な宿駅でした。月前半は万場宿、後半は岩塚宿が人馬継立役を務めました。

十七世紀頃の資料には、万場・岩塚は馬八十疋、寄馬百三疋と記されています。馬の継立拠点としては大きかったようです。

## ★萱津宿

来月はさらに西北に進み、「萱津宿」を訪ねます。「日本武尊(やまとたけるのみこと)」と関係の深い中世鎌倉街道の重要な宿場です。乞ご期待。

